

飯塚 章

昔の学生からのメッセージ

何を話したら良いのか不安がなくもなかった。初めて学生を前にした時、「こんなに幼かったのか」との印象であった。懐かしみながら自分の学生時代の事を思い起こし、その事から話し始めた。それから一人一人に「何で建築科に入ったの？」とか「設計に興味があるの？」とか素朴なことを訪ねてみた。3年の前期であったが、驚いた事に殆どの学生が設計者になりたいたの希望であった。

次の授業の時、課題の説明の合間に今抱えている仕事のことを話してみた。すると意外にも全員が静まり返って席を向き直した。

この心地よい体験で私の不安は消え、方針が決まった。自分を有り体に話す事にした。

そしてこの時に作品見学の事を思い立った。実は私が見たかったからだが、学生たちがどんな反応をするか知りたくもあった。大学近くにある建築家達の作品である。

私が担当したのは前期が3年生、後期が2年生、それぞれ2課題ずつ。最初の方の授業にこの見学会をあてた。1課題2作品程度、出来れば課題にあった作品を選ぶ事にした。

さすがに実物は強力な助っ人であった。授業中の会話も滑らかになり、良くも悪くも課題作品にその事が物語られていた。

こちらから向けた話の一つに地球環境のことで「建築は粗大ゴミで、それに関わった建築家も罪人である」という話をした事があった。この時も学生の目が輝いた。

同じ立場に立ち、デザイン以前の共通のテーマが「建築」「設計」の切り口になるものと思った。この6年間、自分の学生時代を回想することがしばしばであった。無意味に比較しながら学生を見ていた。そしてもう一つ、かつての志を思い返ししながら現在の自分を見ていた。この紙面で詳しく話すものではないが、恐らく私と同じ様な立場にある建築家は、その在りし日の志に比べ、如何ともしがたい不本意さを味あわされているのではないだろうか。対社会への無力感、疎外感、閉塞感、幾分は建築分野の持つ宿命かも知れないが、ここ数十年、着実に変質してきている建築界、企業一辺倒の生産体系になってしまった。この事、そのものに批判的である建築家は、徐々に社会的立場を追われている。理念と現実の狭間で建築家は厳しい状況下にある。

学生達の前に立ち、建築家、設計者の理念を説き、羨望の視線を感じた時、現実の問題において、多少なり罪の意識を感じる事があった。

大学という教育の場も変わってきたように思う。偏差値教育はマス教育に好都合であり、マス教育は社会適合教育、専門技術学校化の道を辿る。組織、企業社会への育成機関になってきたように思われる。

この6年、学生達について感じた事も、情報や技法にいやに敏感ではあるが反面、物の本質を問う事を嫌い、考える事を苦手とする体質。設計に意欲を持つ学生が、そろってコンペ、コンペと騒いでいる姿は象徴的なものと写った。

敢えて言うなら技術や手法よりデザイン、そのデザインよりもさらに広義に捉え個人の理性まで広げる。表現の最初は話す事。話す場をつくり出す。かつて我々が日常的に学生の間で行った話し合いの場はどこに消えてしまったのだろうか。

最後に結果として学生より私の方がずっと勉強になってしまったのは皮肉である。

学生一人一人には物足りなくとも、全体が放つ無言の時代性の如き表現は何より刺激的で今なお考えさせられている。又、予測もなかった事であるが、私と同じ立場にある何人もの建築家達と知り合い、作品を見せ合う仲間にまでなった事も何より

も嬉しい事であった。

今村 雅樹

デザインの可能性にむけて

20世紀の大実験も終盤になりそれなりの大きな成果がみられると同時に、歪みもはっきりしてきました。果たしてこの『近代』というスタディは私たちに幸せな社会をもたらしたのでしょ

うか、それとも不安な未来を提示したのでしょうか、いろいろな意見があると思います。科学の力の恩恵で生活のスピードは早く、24時間をフル活動でき、空間と空間は接近したようにさえ感じられます。豊富なモノに対し、最近の社会的事件をみると反対に人の『心』にはゆとりがなくなったようにも思われます。また今の人間は皆のことではなく、特に「自分のこと」を主張するようになりました。近代が均質なものを目指してきた結果の反動なのでしょう。社会になりつつあり、それで良いとする考えの人もいます。すこし寂しい気がします。本当に建築や都市もその延長線上にあるのか、それともさらに新しい社会の前進を求めるのか、君達が社会にでて設計をする頃には新しい「社会」の枠組みを設定しなくてはなりません。社会が変わろうとしている今を斜に構えないで積極的に前向きに社会創造に参加して欲しいと願います。そして今までの古い枠組みの「建築家」像にとどまらず、新しいタイプの「建築家」像を提示してください。空間を創造する仕事は、未来永劫なくデザインを共に創造しましょう。

高 俊民

6年間を経ての“WISH LIST”

6年間日大で4年生の「設計演習Ⅱ」（選択）の1ユニットを担当させていただき、私にとっては初めて日本において建築家の“養成の現場”を拝見する機会にもなった。結果、無理は承知で“このようなことができればいいな”と端的に思ったことをいくつか挙げてみたい。

最初に、建築学科において学生によりしっかりとした使命感とアイデンティティを養育でき

ないだろうかという点を挙げたい。建築学科が4年制度の理工学部の一学科にすぎない位置付けにまず問題があるが、建築のカリキュラムの中で設計・計画系コースが他の講座とほぼ同等に扱われ、本来アーキテクトになるためには全ての知識がデザイン（定義を再考する必要があるが）に集約されるというスタンスをより明快に打ち出せたらと思う。よって、現状では不幸にも建築デザインの重要性やよるこびを見出せないまま、「設計製図Ⅰ～Ⅲ」をこなした程度で建築学科を卒業する人も少なくないはずだ。アーキテクトが必要とするのは個人的志向や技術に止まらず、より総合的な思考力と倫理観を備えたプロフェッショナルであり、間もなくグローバル化が進むことによって、これらの要素が深刻に問われることになる。また、学生が日頃大学で建築を学ぶ過程で彼らが集う作業スペース（“Studio”のような）が身近に与えられてないことも残念に思う。デザイン作業の大半が各々の自宅で行われているとすると、彼らはどこで建築、人生観、その他諸々のことを楽しく、時には熱く語り、議論し、確かめあいながら学び、向上していくのだろうか。ましてCADが欠かせないツールとしてますますデザインプロセスに進出してくる中、有志と同じ所で手を動かし、口を使ってコミュニケーションすることは、常識と思考力を保つためにもより欠かせないことと思う。

つぎに思うことは、建築を志しても所詮適す人とそうでない人がいると同時に、偏差値の成績がきっかけで理工学部に入學する結果になったというケースも聞く。この事実を認識して、建築学科では成績のみに頼らず入學を許すかは慎重に判断すべきである。加えて、たとえ途中で疑問を抱くことになったら、他の専攻に支障なく移れるシステムをつくるべきだろう。少しでも間違った道を歩まざるをえないような悲劇をなくすことは、最終的にはより優秀なアーキテクトを養成できることにも繋がるとはないだろうか。

最後に、6年間大学で講師として務められたことは、私にとって正に勉強と発見の連続でもあった。この貴重な経験はアーキテクトとして、人間として授か

った恵みであり、大切にしていきたい。長年ご指導いただいた関澤教授をはじめとする諸先生方に心から感謝いたします。

染谷 正弘 非常勤講師を終えて

電車の車窓に映る街並みを見ながら、小さく切り取られた空しか見えない街なかを歩きながら、いつも思うことがあります。ビルや家々が、雑然、混然と建ち並ぶだけの日本の都市、特に東京を中心とする大都市圏は、景観として街並としてどうしてこうも美しくないのだろう……と。特にヨーロッパ諸都市を旅しての帰国直後は、本当に悲しくなるばかりです。

都市を構成するひとつひとつの建物には、必ず設計者がいて施工者がいます。僕もそのひとりです。もうすでに数十件の建築をこの首都圏に設計していますから、僕にもその責任の一端があります。そうした僕が、21世紀の都市づくりを担うであろう建築学科の学生を6年間も指導してきたことになり。ただ、そうした自責の念をバネに、新しい人材育成に期待を込めて、学生達に接してきたつもりです。そして、「教える」のではなく、ひとりひとりの学生に秘められた能力を可能な限り引き出し、その能力にほんの少しだけ指針を与え、建築や都市について徹底的に考えてもらう、同時に建築への「愉しみ」を体感してもらう、そうした思いをもって毎週キャンパスに通いつづけました。

私たちが日々その真只中に暮している都市空間は、いまもスクラップアンドビルドを繰り返して増殖し続けています。実は、そうした街づくりに、設計者や施工者以上に大きな役割を担っている人達があります。いうまでもなく建主であり、建設の発注側に立つ人達です。特に、それを業とするデベロッパーの役割は、その建設（供給）量からしてとても大きいと思われる。彼らにとって建設空間は何よりも「商品」であり、経済原則が最優先されます。その是非を問うことは、この社会に生きていく限り無意味です。ただ、「商品」を大量供給する発注側の立場にあるのだからこそ、経済原則に従いながらも「商品」

の質つまりは建築そして都市空間のありようへの眼差しを持ち続けることが、彼らの役割であり責任でもあると思います。設計者や施工者を選択決定するとともにデザインの最終決定権も彼らにあるのですから。

これまで本校では、設計者や施工者という「受注」側の人材育成が主になされてきたように思います。21世紀の都市空間づくりに向け、民間レベルでの「発注」側にたつ人材育成こそがこれから特に求められるように思えてなりません。本校の教育指導方針にそうした視点が反映されることを期待しています。デベロッパーからの設計依頼の多い設計者として、非常勤講師として、6年間を経て、僕はいまひしひしとそうしたことを感じています。

西野 善介 日大の6年間を終えて

毎週設計演習の日になると、聖橋の坂を小走りに下りながら、今日の彼はどんな案をもってくるだろうかと思うのが楽しみでもあった。そして教室で、先週の段階からの発展を聞かせてもらうのがとても快感であったが、一方、全く進展していない人、あるいはプログラムの入り口を見失って「先生、どうしたらいいでしょうか」と言われて、私も一瞬言葉を失ったことなど、今となってはいい思い出となった。一人一人の感性の違い、また計画に対するアプローチの姿勢の違いを、瞬時に見抜き、的確なアドバイスをすることが、この講師の仕事としたら容易なことではないと、むしろ彼らに教えられる6年間であった。また、講評会での経験豊かな先生方の批評はなるほどこういう見方もあるのかととても参考になった。私の設計演習の課題は実在する敷地に計画するという出題方法をあえて採用し、出来るだけ具体的なリアリティをそのプログラムに求めていった。それは私の育った坂倉的あるいはプラテュイカルな手法から、建築を見据えて、よりよく洗練していくことの有効性に無縁ではないかも知れない。

ともあれ長く、短い6年間であったが無事にその役目を終えられたことは、この間出会った先

生方はじめ、学生の諸氏のお陰であります。ほんとうにありがとうございました。そして我が事務所を訪ねて来た学生さんや、私と議論して眠れなかった諸君、いつか建築の前線で良き作品を見せてください。期待しています。

橋本 功 「教えるということ」と「学ぶということ」

2年生の後期と後半2年間の3年生の前期も加えて、担当した設計製図の非常勤講師の任期も6年の歳月を経て無事終了することが出来ました。振り返って私のささやかな「建築教育」は、学生にとって果たして意義ある内容であったかという感慨が心によぎります。講師の任を引受けるにあたり自分の学生時代を振り返り、今日求められるべき『建築教育』についてひとしきり考えたものでした。しかし結局のところ教育の門外漢である私に出来得たことは、一人の建築家として日頃思っている私の「建築を通して社会へ向き合う姿勢」を語り、また建築への手法をさらけ出し、その様から学生が自らの考え方・姿勢を形成するヒントを感じて貰えばということでした。具体的には製図課題を私自身の課題と受け止め、設計工程の作成・資料収集・敷地調査を実施し、これらをまとめた「基礎資料：覚えノート」を学生に配布すると共に、一方自ら敷地模型を作成し、さらに例案とする建築模型を作成するなどして、設計手順に沿ったスタディの実技を学生の前で披露しました。また学生の提案に対してはトレペを重ねて一人一人ヒアリングをしながら手を加えるという作業を試みました。この為最後の学生との対話が終わるのは夜の10時過ぎという事もあり、思えばよくぞ私に付き合ってくれた辛抱強い学生がいたものでした。

「デザイン」とは、広い意味で形の洗練さ・面白さのみを追求するものでなく、そのバックグラウンドとして時代の社会生活環境を思考し、求めるべき人とのモノとの関係を映し出す媒介と考えます。学生が発信するデザインのバックグラウンドを聞きながらの語らいは、時には新鮮な刺激もあり、まさに教えるこ

とは学ぶことなりの感を胸中ひそかに覚えたものです。6年の歳月はこの間出会った多くの学生一人一人の前途に思いを巡らす心の髪を私に残しています。

山本 理顕

大学院の設計製図の課題を、もう何年になるか忘れてましたが、見ていました。僕の出す課題がちょっと現実離れしていると、多くの学生たちが思ったせいでしょうか、その現実離れがそのままになってしまうような回答に毎回ちょっと参ったなあと思っていました。これは、日大の学生だけではなくて、他の大学でも同じことが言えるのですが、建築の設計に対して、自分で勝手に枠組みをつくってしまって、そこから絶対出ようとしないんですね。枠組みは多くの場合、リアリティーとか現実感とか、そうしたものが外側から常に与えられるものだ、そう思いこんでしまうあたりにあります。現実感なんてものは、自分でつくるものなのに、それが外側から与えられると思っている。そう考えた途端に、設計の仕事の90%ぐらいは放棄していると一緒です。どんなに優れたアイデアでも、そのアイデアに現実性がないと思われたら、絶対採用されませんよね。あたりまえです。その現実性というのは、自分でつくりあげるもんなんです。それをつくりあげる作業が建築の設計というものなんです。リアリティーや現実感というものが、外側から与えられると思った途端に、その外側から与えられた枠組みの中にすっぽりと収まってしまようなアイデアしか思いつかないのです。あるいはどうせ現実的じゃないんだからといってとんでもないアイデアをそのまま、生のままで持ってくる。そのアイデアに現実性を与えるという作業を端から馬鹿にしているんです。まあ、なめてるんでしょうね、どうせ、一つ建築つくったところで、この現実なんてどうにか出来るというもんでもないしなあ、と言ったところなんでしょう。でもたった一つの建築によって世界が変わることだってあるんです。僕はそれを信じたいと思う。ミースの建築一つで、19世紀はすっぽりと始末がついてしまった。そういうこ

とだってあるんだよ、あなたにもできるよ、それを教えたかったけど、あまりうまくいかなかったなあ。

若松 久男 出会いに学ぶこと

早いもので非常勤の授業を持たせていただいてから5年過ぎてしまいました。仕事の都合上、後期のみの授業でしたが、とても実りの多い一時でした。〈教えることは学ぶこと〉だということが正直なところの実感でした。合計約100名余りの学生の皆さんが、私の授業をとって下さり、今も時折一人一人との対話の瞬間を想い出します。一人一人のまなざしの中に、意欲、迷い、悩みなど様々な気持ちをみる思いでした。

私の授業は特に決まった課題を設定しませんでした。課題の設定に際し、一人一人が個性を伸ばしてほしい。自分自身に問いかけて、少しでも私の授業の時間の中で、自己の感性を認識してほしい。課題は与えられるものでなく、自分で発見していくもの。そのような主旨から、敢えて「無題」とすることにしました。初めは簡単のように思われたようでしたが、実は一番難しい課題設定であったかもしれません。しかし、建築のみならず世界が刻々と変化していくこれからの臨んで、そうした〈自己発見〉と〈0からの構築〉といった、自発的な問題意識と構築能力がとても多く必要とされてくるように思われます。課題に悪戦苦闘している学生のみなさんの姿をみてきましたが、どのような形にせよ、この短い時間の感触を生かして、これから幅広く活躍されていかれることを期待しています。

また、取りも直さず、各先生の皆様にはいろいろな場面で大変にお世話になりました。深く感謝しております。個性豊かな先生方との語らい、講評など、多くのことを学ばせていただいたように思えます。幅広い視野で活動をされてられる先生方のお話は、私にとりまして、とても貴重なものとなりました。これからも、この5年間の皆様との〈出会い〉を大切にしていきたいと思えます。また、どこかでいろいろな形で再会できず時を楽しみにしています。